

平成 21 年 6 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006-2008

課題番号：18520252

研究課題名（和文）マルセル・プルースト受容研究：初期批評から文学史形成まで

研究課題名（英文）The Reception of Marcel Proust : from his first critics to his appearance in the history of Literature

研究代表者

禹 朋子 (U TOMOKO)

帝塚山学院大学・リベラルアーツ学部・教授

研究者番号 30309364

研究成果の概要：

マルセル・プルーストの作品、とりわけ『失われた時を求めて』のフランス国内での受容の様相を、作品発表時から第二次大戦直後に至る時期の新聞・雑誌記事、文芸書、文学史書等を探索することで明らかにしようとした研究である。別記の口頭発表、論文発表の他、この種の研究に不可欠な書誌を作成し、データ管理すると同時に冊子を印刷して専門家に送付した。冊子には主にフランス本土で1913年から1954年に発表された記事、論文、図書1773レフェランスを収め、雑誌名、作者名インデックスを附した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	360,000	2,460,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：フランス文学 マルセル・プルースト 受容研究 文学史 文芸誌 文芸新聞 文芸批評

1. 研究開始当初の背景

マルセル・プルーストは、その研究が最も盛んに行われているフランスの作家の一人である。1970年代の新批評がプルーストを好んで分析の対象としたこと、さらには運良く保存されていた草稿等の資料をもとに、80年代後半にプレイヤード新版が高度に専門的な校訂版として出版されたことは、文学の専門家や愛好家のみならず衆人の目にプルーストの「偉大さ」を印象づける役割を果たしたと言える。

実はこのようなプルースト研究隆盛の前提となっているのは、文学史におけるプルーストの地位の重要性である。実際、現在ではどの文学史家もプルーストに独立した一節を割いて、20世紀における最重要の小説家の一人として扱っている。このような背景があつてこそ、プルーストは種々のアプローチによる研究対象となっているのである。

ではさらに遡及して、プルーストがその地位を獲得するに至った経緯はいかなるものであったかを問うてみる時、そこにあるのは豊富な先行研究ではなく、むしろ欠落であつ

た。

『失われた時を求めて』の初期受容について一般に流布している理解は次のようなものである。すなわち、作品が余りに特異であるために出版の引き受け手がなかなか見つからなかったこと。第一巻出版時(1913年)、有名批評家はこれを酷評したこと。しかしこれにわずかに遅れて J. リヴィエールと A. ジッドが作品の価値を発見したことにより、*Nouvelle revue française* 誌の関係者を中心に評価が高まったこと。そして第一次大戦後、第二巻がゴンクール賞(1919年)を受賞したことにより、プルーストの栄光は確かなものになった、という筋書きである。しかしこの作品の最終巻が発売されるのは1927年のことであり、少なくともこれ以前に作品と作家の評価が確立していたと考えることは難しい。

ところが現代的な意味での文学研究以前のプルースト受容に関しては、多くの研究書がごく限られた少数の記事を繰り返し引用することが目立ち、本研究開始当時、まとまった研究書としてはわずかに次のものが挙げられる程度であった。

- Alden, Douglas W., *Marcel Proust and his French Critics*, Los Angeles, Lymanhouse, 1940.

- Ahlstedt, Eva, *La Pudeur en crise : un aspect de l'accueil d'À la recherche du temps perdu de Marcel Proust 1913 - 1930*, Göteborg, Acta Universitatis Gothoburgensis ; Paris, Jean Touzot, 1985.

ただしこれらの著作も、書誌的に重要ではあるが対象年代が狭く、また分析的というよりは記述的であり、何より書誌に記載されている資料全体が実際にいかなるものであるかについてのイメージを与えるには至っていないかった。

以上の状況から、忘れられかけた20世紀前半の文芸批評活動の現場を掘り起こし、プルーストが現在みるような文学史上の地位を確立するに至るまでの経緯を明らかにすることは、当時を知る世代が消え去った現在においては急務であると判断した。

2. 研究の目的

(1) 書誌作成と資料調査・収集

受容研究は、過去の読者、批評家の残した言葉をたどることによってのみ可能になる。従って本研究ではまず、一定期間に発表された新聞・雑誌記事、文芸書、文学史書等の書誌を作成し、これを実際に調査・収集することが必須であった。対象とする期間に

については『失われた時を求めて』第一巻が刊行された1913年から最初のプレイヤード版が刊行された1954年までとした。また対象は基本的にフランス本土で出版された刊行物とした。

(2) 受容の諸相の解明

『失われた時を求めて』は、その特異な文体、物語の筋のとらえ難さ、登場人物たちの人格分裂ともいべき一貫性の欠如等、第一巻発表当初には多くの読者や批評家達が拒絶した要素を含んでいる。本研究は、当時きわめて革新的であったこれらの小説技法が容認され、積極的な評価を得るに至るまでのフランス本国における受容の諸相を当時の新聞・雑誌等の定期刊行物、関係者や作家の証言・書簡・回想録、学術研究、文学史書、教科書等を精査することで明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

(1) 書誌の作成

①対象時期に出版されていたあらゆる刊行物を完全に調査しプルースト関連記事を抽出することはひとつの理想であろうが、同時に本研究の予算・規模から考えると非現実的な選択である。

そこで本研究では既存の研究書に含まれる情報を元にできるだけ網羅的な書誌を作成し、これを実際の資料調査によってより正確なものとするという手法をとった。

②既存の書誌情報によって現物を特定することは、20世紀前半、とりわけ第二次大戦以前の資料に関しては必ずしも容易ではない。調査によって記事を特定するに役立つ情報(副題、ISSN番号、所蔵機関の整理番号等)が得られた場合、これを追加した。

定期刊行物、とりわけ新聞の場合、発行途中でタイトルが変更されることがままある。また、既存情報が資料のタイトルを簡略化して記載している場合や同名の刊行物が同時期に複数存在する場合、資料の特定自体が困難である。そのような場合、必要情報を追記した。またどうしても該当の刊行物を特定するに至らなかった場合、その記事情報は作成した書誌から削除した。

また現代の学術論文とは異なり、この時期の記事には、それだけで記事の特定が可能になるようなタイトルがつけられていないことが往々にしてある。このような場合には、コラムのタイトル等をできるだけ詳細に記すこととした。

図書や定期刊行物の文芸欄、書評欄のごく一部がプルースト作品の批評に充てられて

いる場合、その部分のページも記するよう努めた。

新聞記事の場合、元になる書誌情報が該当ページを記載していないケースが多く見られた。可能な限りこれを補完したが、実際に現物を閲覧することができず、図書館間の相互利用によって記事の複写を入手したもののページ全体の印影が得られない等の事情でページを特定するに至らないケースがあった。しかし手許の情報で現物にたどり着けることは確実であるため、この状態での情報を記することとした。

日付や巻・号、掲載ページ等、元の情報に誤りがあった場合、可能な限りこれを修正した。しかし調査によって現物を特定できなかったもの、複写依頼の際「該当記事なし」の回答があったものについてはこれを削除した。

資料の保存状態が理由で現物を閲覧することができず、また複写も謝絶された場合、元情報を掲載している研究書を記載した上でこの情報を残した。

③調査の途中で周辺記事を探した結果得られた新情報、あるいは入手した図書、記事での言及をもとに得られた記事情報についてはこれを追加した。

(2) 資料調査・収集

資料の調査・収集にあたっては国内外の図書館、および資料保存機関で資料を閲覧・筆写・複写したほか、資料複写依頼を行った。その方法は次の通りである。

①図書については可能な限り国内外の古書店から購入した。

②日本国内の図書館所蔵の資料は相互利用によって閲覧ないし複写を入手した。

※定期刊行物の大半と外国の学位論文の全て、および購入できなかった一部の図書についてはフランスでの現地調査と海外の機関への複写依頼に頼ることとなった。以下はその方法である。

③ 現地調査はフランス国立図書館、ならびにパリ地域の複数の図書館、資料館（パリ大学図書館、サント=ジュヌヴィエーヴ図書館、パリ市立図書館、ジャック・ドゥーセ図書館、グスタフ・マーラー音楽資料館等）にて行った。資料を特定すると同時に正確で詳細な情報入手に務め、また可能な限り現場で資料を閲覧、複写、筆写した。

④現地で調査したが現場での作業が困難であった資料については複写依頼を行った。

⑤パリ以外の外国の都市に所蔵されている資料についても所属機関図書館を通して相互利用の枠内で複写依頼を行った。

⑥上記④⑤による複写依頼が謝絶された資料のうち、l'Association pour la conservation et la reproduction photographique de la presse（略称 ACRPP）が所蔵しているものについてはこちらに複写を依頼した。

(3) 資料分析

以上の調査から得られた資料情報は Excel を使用してデータ化し、発表年月日、著者名、タイトル、発表媒体、資料調査・入手先等の指標による並べ替えや検索を行えるようにした。また一般的なレフェランス記述形式で出力するにあたっては、文献管理ソフト End Note を使用した。

資料の分析にあたっては、その全体像を把握することに務めると同時に、別記の口頭発表や論文執筆においては、通説の検証、これまで着目されてこなかった視点による資料分析を行った。その際、当該資料の他、関連するその他の資料を必要に応じて購入、ないし複写により入手した。

4. 研究成果

(1) 資料調査方法の確立

資料調査の過程で、この分野と対象時期の資料収集に関する問題点とその解決法を見出すことができた。これは今後の研究遂行にとっても大いに有用なスキルである。以下にその要点を記す。

カタログについては、現在多くの図書館カタログが電子化され公開されている。国内においては Webcat、フランスについては国立図書館のカタログと大学図書館等の横断カタログ SUDOC が最も有用性が高い。しかし Webcat では新たに付与された ISSN 番号の追加入力が相当の期間成されていないため、これによる検索が必ずしもできないこと、フランス国立図書館カタログについては新たにマイクロ化された資料の情報が完全ではないこと、SUDOC については各館の連絡先等の情報更新が遅れていること等の問題点があり、利用にあたって注意が必要であることが分かった。

フランスで現地調査を行う際には、施設・資料の利用法や使用できる器機、複写方法が各館で異なり、効率よく調査を進めるにはこれらを熟知することが必要である。複数回の現地訪問により、その経験を積むことができた。

外国に複写を依頼する場合も同様の経験

が研究の助けになる場合が多い。フランス国立図書館の場合、費用が比較的安価で、かつ複写業務がシステム化されており、信頼度が高い。個人で申し込みができるが、依頼から見積書を受け取るまでに約3ヶ月、これに従い支払いをすると実際の複写作業が開始され、現物を受け取るにはさらに2ヶ月ほどの期間を要する。

資料の状態によっては複写が許可されないことがあるのは当然だが、マイクロ資料についても複写不可との返答を受ける場合がある。自館所蔵の資料をマイクロ化する場合は一部を閲覧に供し、もう一部を複写業務を行うアトリエに保管して依頼に応じているのに対し、原資料がない場合は図書館が外部団体（多くの場合 ACRPP）からマイクロ資料を一揃いのみ購入するため、複写業務用分がないのである。2007年度の現地資料調査の際に担当司書と面談し、以上のような事情が判明した。資料複写の可否はカタログに記載されておらず、依頼に対する回答を待つようにとの説明を受けたが、その後の調査により本研究に必要であった雑誌のうち「不可」に該当するタイトルの一覧を作成することができた。その場合、最初から他の手段を取ることができ時間の節約になる。

フランスの大学・公立図書館は、基本的には相互利用により複写依頼を受け付けている。日本の大学図書館から英語圏以外の図書館への依頼については頻度が少ないため当初は不明な点も多かったが、所属機関の図書館の助力により、連絡業務、支払い手続き等に関する問題を解決すると共に、依頼に迅速に対応してくれる館はどこか、といった情報も蓄積され、依頼先の選択に役立った。

代替手段がない場合にはACRPPへ依頼する。複写費用が極めて高価である上、見積もりと実際の作業にかなりの時間を要し、かつかなり粘り強く交渉する必要があった。利用には十分な注意が必要であるが、一旦連絡が取れば仕事は信頼でき、複写の質も高いことが分かった。

(2) 書誌作成

調査によって作成した書誌は、電子データ化したほか、2009年5月に印刷（B5版112ページ）して国内外の研究者と関係機関へ送付した。フランス本土で発表された図書、記事に重要と思われる外国記事少数を加え、1773レフェランスを収録するとともに、作者別、雑誌別のインデックスを巻末に附した。

国内外の送付先からは、有益な成果であるとの反響が寄せられている。*Bulletin Marcel Proust*の編集者からは次号に紹介文を掲載したいとの申し出があった。

(3) 資料収集と保存

もちろん書誌データのみならず、資料の現物についてもリストアップしたもののうち95%程度は現物を閲覧、複写、ないし筆写することができた。複写物は、スキャンされた情報については複数のハードディスクに収め、紙コピーについては一点ずつラベルを附して封筒に収め整理した。受容研究のみならず、今後も様々なプルースト研究に役立つ貴重な一次資料である。

(4) 資料分析

資料を概観すると、当時は現在のような研究論文などはなく、出版速報、新聞評、文芸誌での論評、プルーストについて触れた本、それについての書評、という具合に連鎖反応が続いていく。その量が雪だるま式に増え、「話題になる作家」としての評判が形成される様子が観察される。

また作家の死後は、おびただしい回想記事や書簡の類が発表される一方、文芸専門誌ではよりまとまった論考が発表されている。単発の個人的な観点に基づく批評の他、いくつかのトピックをめぐって複数の批評家が論じ合うという状況も発生する。これは必ずしも作家に好意的な論調で行われるとは限らない。しかしそのような反応も最終巻出版後には沈静化していく。他方1930頃には医学部を中心に博士論文の対象となり、いくつかの文学史書にも最新動向の一つとして取り上げられ始めている。

1939年以降、戦争終結までの期間については関連資料は極めて乏しい。注目すべきは戦後、プルーストが一举に郷土（イリエ）と強く結びついた国民的作家として論壇に再登場することである。この時点でプルーストの地位はもはや揺るぎないものとなっている。

別記の口頭発表、執筆論文では、第一巻出版前後の経緯を再考し、また1920年代にフランスで翻訳が出版されつつあったフロイトの受容とプルースト評との関連を詳しく論じた。その後、2009年4月の国際シンポジウム（*Proust en son temps : contextes culturels d'une genèse Romanesque*、於東京日仏会館、4月18-19日開催）では、フランスにおけるドストエフスキー受容とプルーストの関連について発表を行った（*«Dostoïevski dans la Recherche : les enjeux internes et externes»*）。

本研究の実施期間においては以上いくつかの分析を行うことができたが、今回得られた資料は、今後もさまざまな観点からの研究を可能にするものである。資料分析の過程で当時の新聞、雑誌の概要やその重要度を測り、同時代の人物に関する周辺情報を得ることができたこともまた大きな成果であり、今後の研究を助けるものと期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

Tomoko Boongja WOO, « La réception d'*À la recherche du temps perdu* autour de la *Nouvelle Revue Française* », 帝塚山学院大学研究論集 文学部, n° 42, 2007.12, p.15-28.
(査読無)

禹 朋子, 「作品受容における文芸新聞の役割: 『失われた時を求めて』とヌーヴェル・リテレール紙(1922-1954)」, 帝塚山学院大学研究論集 文学部, n° 43, 2008.12, p. 15-27.
(査読無)

Tomoko Boongja WOO, « Lecture de Proust, à travers Freud, par les premiers critiques », *Bulletin Marcel Proust*, n° 58, 2008, p. 69-79. (査読有)

[学会発表] (計3件)

Tomoko Boongja WOO, « La réception d'*À la recherche du temps perdu* autour de la *Nouvelle Revue Française* », プルースト研究会, 2007年4月14日, 於京都大学.

Tomoko Boongja WOO, « Lecture de Proust à travers Freud chez les premiers critiques », プルースト研究会, 2008年4月12日, 於京都大学.

Tomoko Boongja WOO, « La réception d'*À la recherche du temps perdu*: ses éditeurs », Pierre-Edmond ROBERT 教授セミナー, 2008年3月17日, 於パリ第3大学.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

禹 朋子

帝塚山学院大学・リベラルアーツ学部・教授

研究者番号 30309364